



Enterprise Architect 17.0 feature guide

by Sparx Systems Japan

Enterprise Architect 17.0 機能ガイド

(2024/06/05 最終更新)



このドキュメントでは、Enterprise Architect 17.0 で追加・改善・変更となる主な機能についてご紹介します。なお、利用できるエディションが限られる機能もあります。ご注意ください。

このドキュメントの内容は、ドキュメント作成時点での情報となります。最終的なリリースまでに、記載している内容の変更・削除・機能を利用できるエディションの変更等が発生する可能性もあります。

青字で記載の内容は、説明する機能の操作・設定方法です。

新機能の概要

バージョン 17.0 での機能強化は、ダイアグラム内での操作性の改善と、モデルの編集履歴の活用支援が中心となります。そのほかにも、さまざまな既存機能の改善・強化・バグ修正を含みます。

どちらも、表記方法を問わず利用できる機能であり、多くの方に新バージョンの機能が役に立つと考えます。

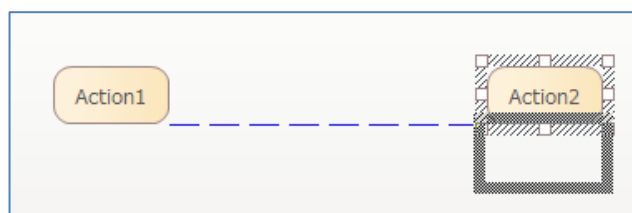
ダイアグラム内での操作性の改善

ダイアグラム内での操作について、さまざまな改善を行いました。中心的な改善点である、「整列や配置操作の改善」「要素の挿入」「既存の要素との結びつけ」の3点を紹介します。

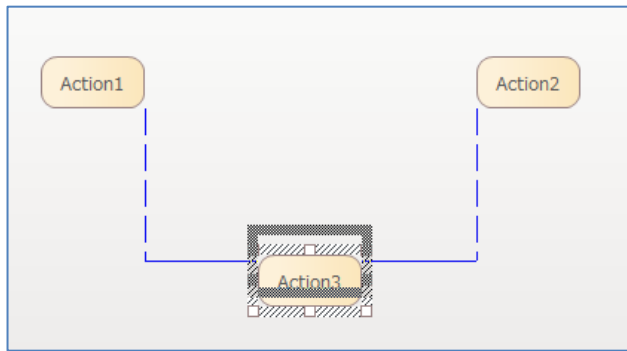
要素の整列や配置操作の改善

従来から、ダイアグラム内で要素の位置を変更する際に、他の要素の中心線で揃えるための補助線が表示される機能がありましたが、さらに以下の状況でも整列・配置を支援する補助線が表示されるようになりました。

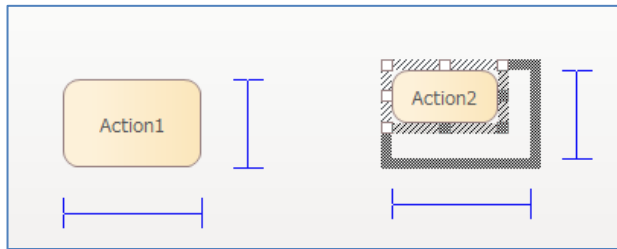
- 要素の上下あるいは左右の端



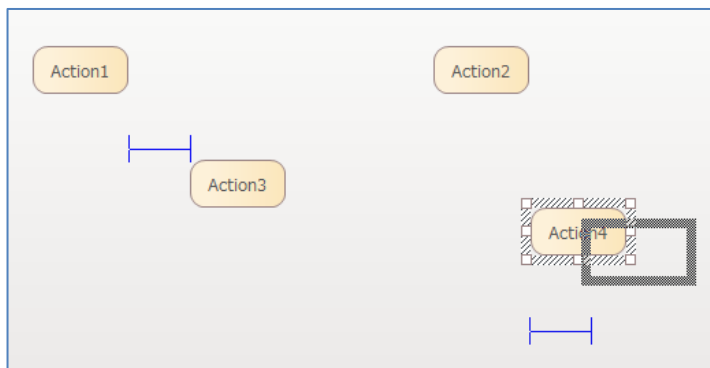
- 2つの要素間の中心位置



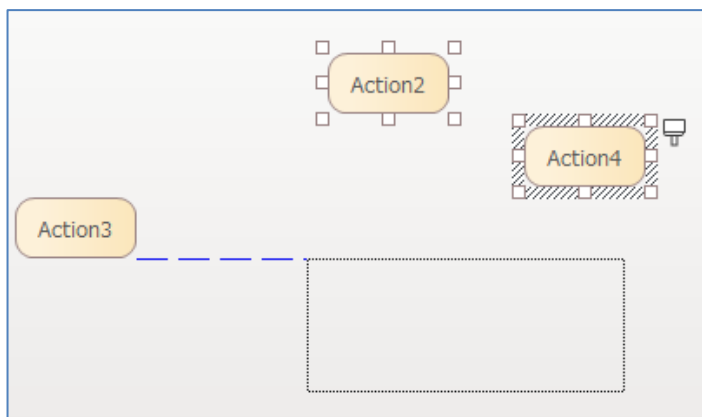
- 要素の大きさを調整中に、他の要素と大きさが一致する場合



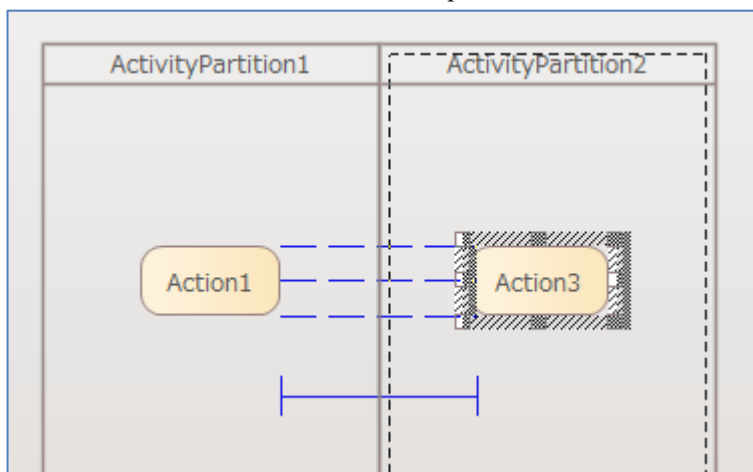
- 要素の相対的な間隔一致



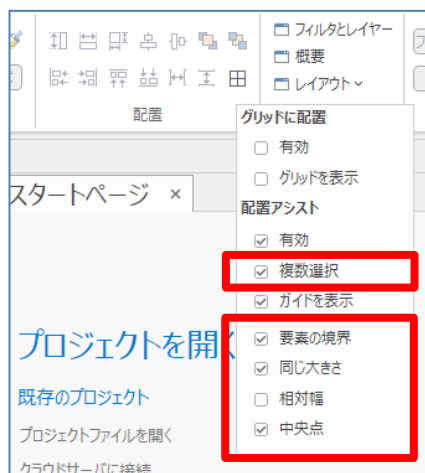
- 複数要素移動時の補助線の表示



- 親要素が異なる場合も補助線の表示対象に改善



補助線を表示するかどうかの設定は、[ダイアグラムリボンの配置パネルの右下にあるボタンを押すと表示されるボタン](#)から変更できます。下の画像の赤枠部分が、バージョン 17.0 で追加された内容に関する設定です。

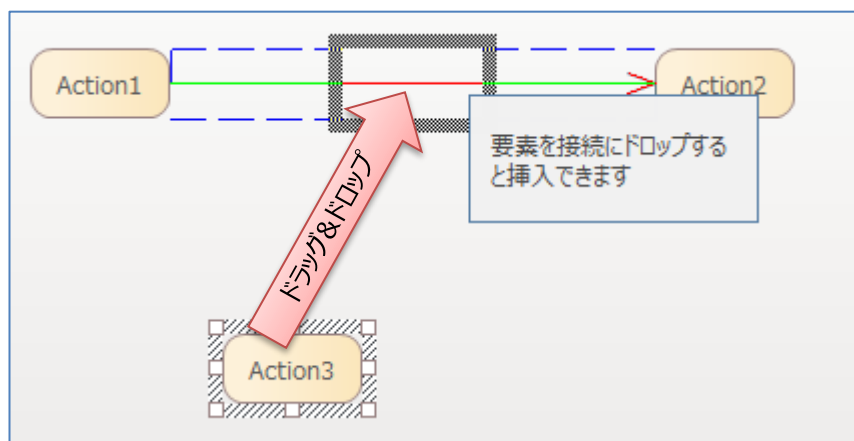


なお、「要素の相対的な間隔一致」の補助線は、該当する状況が多い一方でその状況で揃えることは多くないようにも思われるため、OFF にする方が快適かもしれません。

(Enterprise Architect 日本語版をインストール時にはこの補助線のみ OFF になっています。)

要素の挿入

既存の要素間の接続に、他の要素を挿入できるようになりました。[ダイアグラム内で要素を接続の上にドラッグ](#)してください。目印として、接続の上に載せた際には対象の接続が赤色に表示されます。ツールボックス内の要素を接続の上にドラッグして新規要素を挿入することもできます。



(設定により、上の図のようにポップアップで動作を示すメッセージも表示されます。なお、この例では前述の補助線により、2つの要素間の中央地点・上下も揃った位置に挿入されることがわかります。)

なお、現時点では挿入した要素を元のように取り外すことには未対応です。

(前後の接続の状況などで、取り外した結果がどのようになるかは考慮が必要なため、将来的な対応を検討しています。考慮が必要な一例として、SysMLのブロック間の集約ではプロパティ要素が結びついています。このような関係でブロック要素を安易に取り外せるようにしてしまうと、結びつくプロパティ要素が削除され、内部ブロック図で使われている場合には図の内容が破壊されてしまいます。)

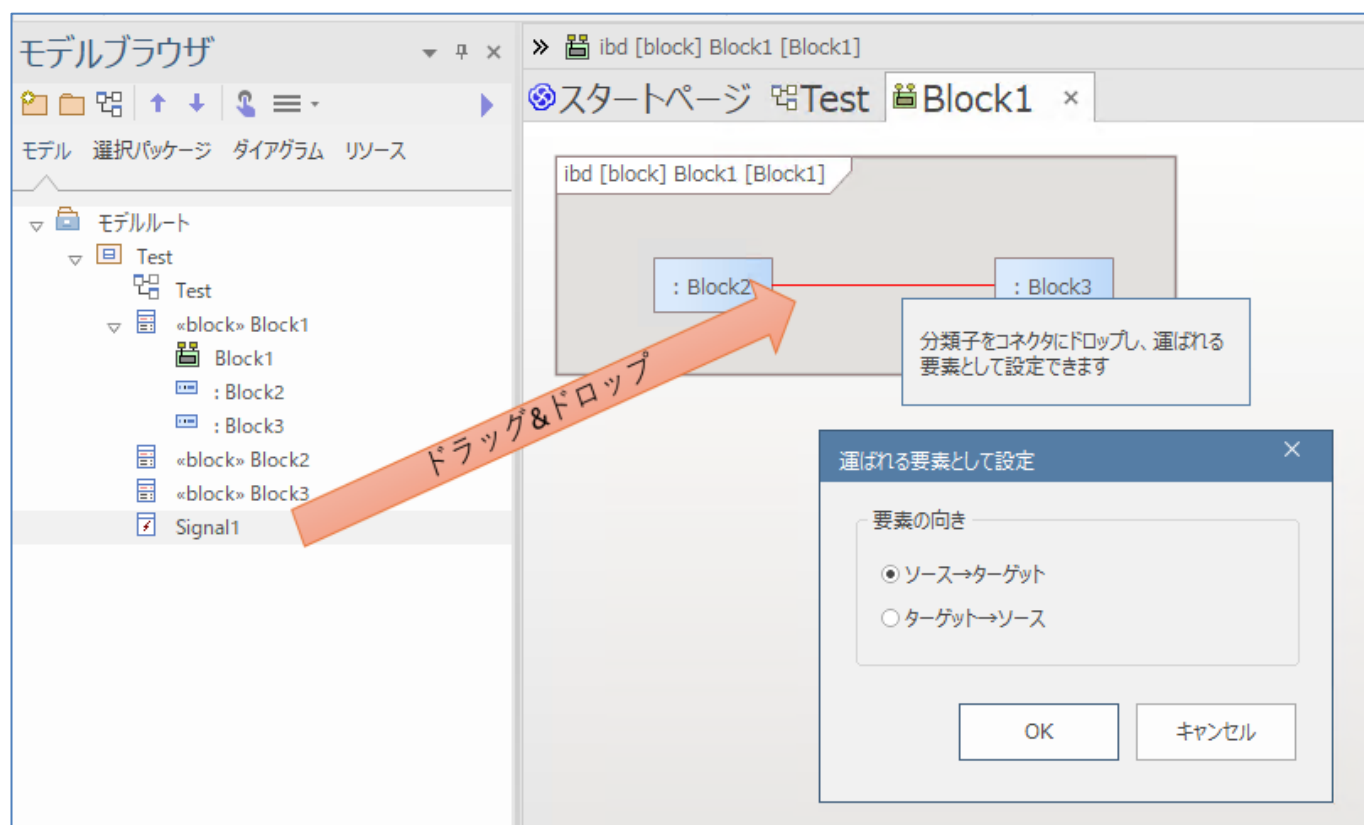
アクティビティ図の場合には、アクティビティサポートアドインを利用すると、中間の要素を削除してフローをつなぎ直すことができます。

既存の要素との結びつけ

モデルブラウザ内の要素をダイアグラム内の要素や接続にドロップすることで、その要素・接続に応じた特別な処理を実行できるようになりました。以下の操作が対象です。

- 分類子をアイテムフローにドロップすることで、運ばれる要素として指定
- トリガを遷移にドロップすることで、遷移のトリガとして指定
- アクティビティを状態にドロップすることで、entry/do/exitの処理として指定
- 操作やシグナルをシーケンス図のメッセージにドロップすることで、操作やシグナルと結びつくメッセージを作成
- シグナルをシグナル送信アクションや受信イベントアクションにドロップすることで、対象のシグナルとして指定
(受信イベントアクションの場合にはシグナルトリガも自動作成)

これらの操作により、選択画面から要素を選択する手間を省け、効率的にモデルの作成ができます。



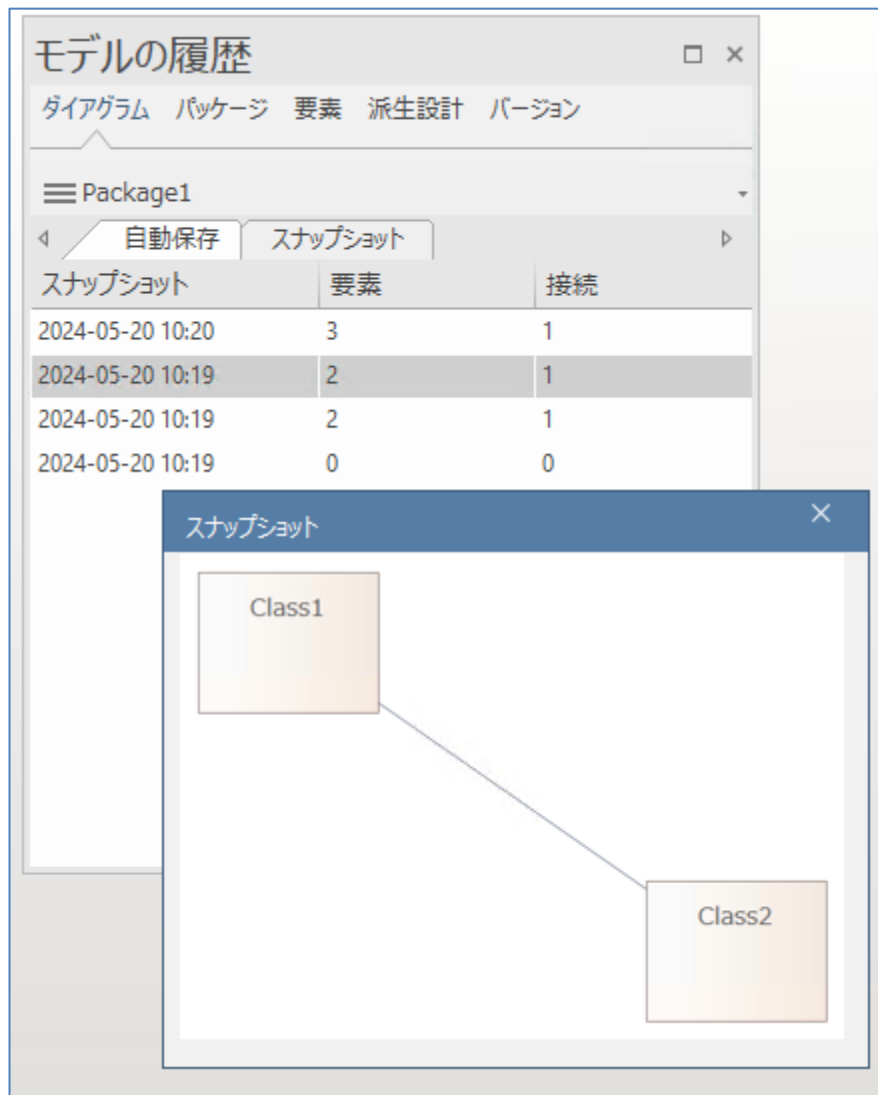
モデルの編集履歴の活用支援

Enterprise Architect では、さまざまな機能でモデルの編集履歴を保持・参照できます。バージョン 17.0 では、モデルの履歴サブウィンドウを追加し、以下の機能に関する情報を一元的に参照・操作できるようになりました。また、項目によっては現在の内容との差分や、2つの項目の差分を表示できます。

(「ホーム」リボンの画面パネルにある「設計」ボタンを押すと表示される画面で「モデルの履歴」を選択)

- スナップショット (新規機能)
 - ダイアグラム
 - パッケージ
 - 要素
- ベースライン
- 派生設計 (バージョン 16.1 までの「変更の把握と追跡が可能なモデル」の機能の名称を変更しました)
- バージョン管理
- 監査

スナップショットは、今回のバージョンで新規に追加された機能で、対象の内容を保存してその内容の参照や変更後の差分比較に利用できます。従来のベースライン機能よりも高速に動作します。



派生設計は、バージョン 16.1 までは「変更の把握と追跡が可能なモデル」として、モデルブラウザ内でパッケージを右クリックすると表示されていた「新規バージョンとして構造を複製」で実行できる機能です。バージョン管理機能との区別が付きづらいことから、機能の名称やメニューの項目名を変更しました。基本的な機能の変更はありませんが、差分の比較ができるなどいくつかの機能強化を行いました。

また、モデルの履歴サブウィンドウの追加と合わせて、差分比較の結果画面の表示を改善しました。差分の種類を明確に表示するほか、差分がある項目のみを一覧で表示するようになりました。

モデルの要素	状態	プロパティ	モデル	ベースライン
Package3		更新日	2024/06/05 13:07:30	2024/06/05 13:06:55
新規追加	モデルのみ			
名前変更	変更あり			
Class3	ベースライン...			
Package3	変更あり			

補足: ダイアグラムにおけるモデルの差分表示自体には大きな変更はありません。そのため、接続の変更(特に振る舞い図の変更)や図としての差分の比較など LemonTree が有用な状況では、引き続き LemonTree が効果を発揮します。

(今回のバージョンでは、LemonTree のみで提供している機能と同等の機能追加はありません。)

データウェアハウスのモデリング

BigQuery や Hadoop・Redshift などのデータウェアハウスに関するモデリングの機能が追加されました。これらのデータウェアハウスの設計に Enterprise Architect を利用し、設計内容から DDL を生成したり既存の DDL を読み込んでこれらのデータウェアハウスの設計を図として可視化したりできます。

(作成するダイアグラムの種類として、それぞれのデータウェアハウスに関するダイアグラムを選択)

パースペクティブをモデルで定義

利用できる表記方法や要素・接続などを絞り込み効率的な作業を支援するパースペクティブの機能について、独自のパースペクティブをモデルとして定義できるようになりました。定義のための MDG テクノロジーが追加され、独自の図や要素が利用できます。

(作成するダイアグラムの種類として、分類「パースペクティブモデリング」にある「パースペクティブワークスペース」ダイアグラムを選択)

また、この改善にあわせて、パースペクティブの設定が影響するいくつかの画面・操作について、バグの修正や動作の改善を行っています。

表記方法への対応

ArchiMate 3.2 および RAAML (Risk Analysis and Assessment Modeling Language) に対応しました。

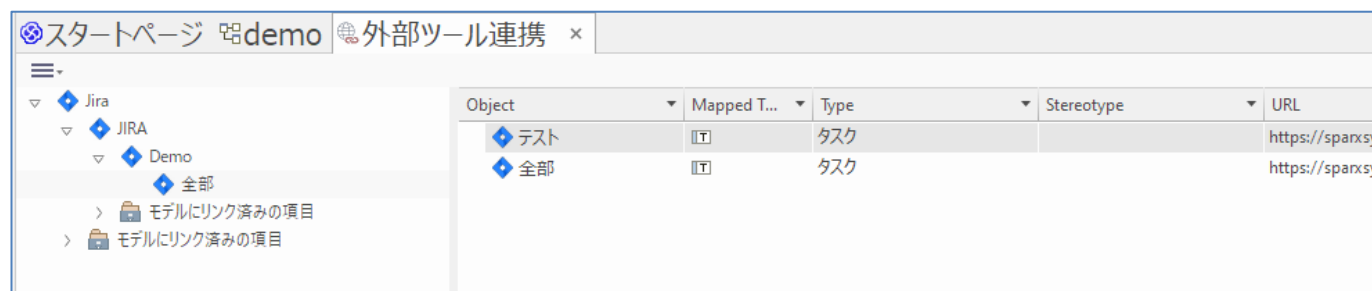
- ArchiMate 3.0の内容は、ArchiMate3.1 のプロファイルに対して追加したため、表示上のバージョンは 3.1 のままです。3.1 のモデルを継続利用できます。
- RAAML は、ユニファイド版以上のエディションで利用できます。

なお、当初は SysML 2.0 への対応もこのバージョン 17.0 で予定していましたが、SysML 2.0 の仕様がまだ完成しておらず不明瞭な点も少なからず残っており、また既存の UML/SysML などと異なる点が多いため実装に時間がかかっています。その結果、このバージョン 17.0 の初期リリースでの対応は行わないこととなりました。対応は引き続き行っており、将来的なバージョンでの対応を予定しています。

外部ツールとの連携機能の強化

Pro クラウドサーバの有償ライセンスで利用できる、Jira など外部ツールとの連携機能について、外部ツールの連携タブの表示・操作を改善しました。

(「アドイン・拡張」リボンの「外部ツール連携」ボタンを押す)



連携しているツールのフォルダ構造について、ツリー形式で表示するようになり、構造がわかりやすくなりました。また、メニューなどで英語表示になっていたいくつかの箇所を日本語表示に改善しました。

そのほか、連携ツール側が対応していれば、ダイアグラムの画像を連携ツール側に添付する機能の追加や、同期処理(特に変更の衝突時の処理)を改善しました

(改善点・強化点によっては Pro クラウドサーバ 6.0 の利用が必要です)

その他の主な変更・改善・修正

- ・ スタートページ内のタブを廃止しました。モデルテンプレートの利用など、スタートページ内のタブとして表示されていた内容は、独立したタブとして表示されます。
- ・ ナビゲーションセルのコンテキストメニューで、ダイアグラムを開く際に別のタブとして開く選択肢を追加しました。
- ・ アクティビティ図で、レーン・プールの向きを指定できるようになりました。新規にアクティビティパーティション要素を作成する場合の向きに反映されます。
(ダイアグラムの背景で右クリックし、「レーン・プールの向き」以下の項目を選択)
- ・ ダイアグラムのプロパティサブウィンドウに「表示」グループを追加し、表示項目に関する項目をまとめました。
- ・ ダイアログの描画のフォントを改善しました。Meiryo UI を利用するようになりました。フォントは、レジストリを編集することで変えることが可能です。
- ・ レビューの管理タブの表示内容や表示状態の調整機能を改善・強化しました。
- ・ 64 ビット版の Enterprise Architect で、EAPX ファイルが利用可能かどうかの判定を改善しました。
- ・ PHP7, C++20 で追加された新しい表現のいくつかに対応しました。
- ・ Repository.GetElementSet で対象の要素を GUID でも指定できるようになりました。
- ・ DDL ファイルの読み込みに対応しました。
(「コード」リボン内の「データベース」パネルにある「DDL の読み込み」)
- ・ アドインで、複数の MDG テクノロジーを追加できるようになりました。(関係するイベントが追加されました。)

- ・ いくつかの機能・リボン・メニュー項目の名称を変更しました。
- ・ 既知の様々なバグ修正や細かい機能改善・画面表示の改善を行いました。
- ・ アクティビティサポートアドインをインストーラに同梱し、アクティビティ図における操作性を改善しました。

注意事項

初めてバージョン 17.0 以降をインストールする場合には、インストール完了後に Windows の再起動が必要です。再起動せずに利用すると、画面などが正しく描画・表示されません。インストーラのメッセージに従って再起動をお願いします。